

むざし 武藏^{ムサシ}口國 藏^{ムサシ}字ハ、ザニ用ヒタルナルベケレバ、シニ當タル字ヲ省ケルナルベシ（ザシナニハ用ヒガタカ、古事記ニハ牟邪志ト書キ、邪モ藏モ濁音ナルベシ、古書ニ身刺トモ書タリ、身ルベケレバナリ、ト、例多シ、コ）

〔日本風土記一寄語島名〕武藏モウサシ木散署モウサシ

〔倭訓栞前編三十一〕むざし 武藏をよむは、音の轉せる也、もと古事記には胸刺と見ゆ、又歌に佐

泥佐斯佐賀牟とあるも、佐は發語、泥はむねの略、さむねさしにて、武藏相模を並べ擧たる也、にひばりつくばを並べ擧たるが如し、又或は佐斯の間泥を脱し、さねさねしにて、相模の枕辭也ともいへり、輕皇子の歌に、さねしさねてはとよめるが如し

〔古事記傳七牟邪志國造〕武藏なり、今は邪を清て唱れども濁るべし、此邪又藏字、又万葉十四に、牟射志野と書る射字、いづれも濁音に用る例なり、名義未思得ず、（師説には、相模武藏もど一ツにて、牟下と云、その上は牟を略き、下は毛を略けるなり、凡て牟佐てふ地名國々に多く、又東の國々は、上總下總上野下野などの如く、上下に分例なりとあり、此説うち聞には、諸なりとおほゆれど、なほ定め難きことあり、其由は、中卷倭建命の處に云べし、）

〔古事記傳二十七〕さて佐斯を國の名と云は、駿河相模武藏の地を、總て本は佐斯國とぞ云けむを二に分けて、相模武藏とはなれるならむ、駿河は後に又相模より分れたること、上に云るが如し、かくて其相模と云名は佐斯上の斯を省き、武藏は身佐斯の意なるべし、古書ともに身刺と多く書り、身とは中に主とある處を云、屋の中に主とある處を身屋と云が如し、後に母屋と云は、牟夜を訛れるなり、されば武藏は佐斯國の内に、主とある真原の地なれば、如此は名けつらむ、佐を濁るは連便なり、さて一國を二に分て名る例、或は前後、或は上下と云ぞ、なべての例なれども、又丹波を分て、丹波丹後と云は、後に對へて、丹前とは云ざれば、此佐斯國を分たるも、佐斯上に對へて、佐斯下とは云ざるも、例あることなり、